

世界は変わる

劇団セカイ 第一回公演

水
上
下
波

YOTAYU
AMPLIFIER

子供のころに六十億だった世界人口は加速度的に増え続け、私が大人になる前にはあつさりと七十億人を突破していた。この国だけなら一億二千万人、東京だけでも一千万人以上。どちらにしてもそれは途方も無さ過ぎて、ただの数字以上の意味なんて無い。

一生のうちで私が出会うひとは、そのうちのどれくらいなんだろう。そんなことをふと考えてみた。たぶんそれは、思った以上に少ないんだろうな、という気がした。その中でも、親しく会話を交わすようなひとは、きっと数えるくらいしかないのだろう。

そう思うとさつきから目の前を通り過ぎる人波が、急に恐ろしいものみたいに思えてくる。彼らはそれぞれがひとりひとりの人間のはずなのに、この街では群集というただの一塊に過ぎないのだ。

「はあ」

自然とため息が漏れた。

さつきから目の前を行きかう人たちは片時も途切れることなく、縦横無尽にアトランダムな曲線を描き続ける。無機質で煌びやかなネオンが、きらきらと空虚に町並みを染め上げている。私はそれをぼんやりと眺め続けた。

誰かと待ち合わせをしているわけではない。これはただの恒例行事のようなもので、わたしは特に目的があつてここにいるわけではなかった。ただ、なんとなく、まっすぐ家に帰ってしまうのが嫌で、ここで時間を潰しているだけだった。

楽しそうに隣の人と話しながら足を弾ませるひと。疲れきった表情で、足取り重く引きずるように歩くひと。年齢も性別もバラバラなひと達が私の前を通り過ぎていく。

このひとたちそれぞれに、それぞれの人生があつて、それぞれに自分の世界を生きているのだろう。けれど、そのどこにも、私という存在は含まれていない。

だから、こうして駅前の噴水脇に腰掛けて人間観察を続けているような女に、気を止めるひとなんていない。せいぜいが時々怪訝そうな目を向けられるくらいだけど、それだつてきつと三秒後には忘れ去られているに違いない。

世界はこんなに広いのに、この街にはこんなにたくさんの方がいるのに、きつとどこまでも私は孤独だと思つた。

七人。それが私が勤める小さな印刷会社の全従業員数で、この東京で私がもっている世界の全てだった。

地元ではそここの私立大学を卒業して、就職を期に上京してきてからもう三年になる。東京での生活にはすっかり慣れたと思うけれど、親しい人間はまだ一人も作れていない。

今の私は、ただ職場と小さなアパートを往復するだけの生活を続けているだけだった。大切にしていたもの、何もかもを地元置いてきてしまったという思いが、心の奥にあった。

地元の友人とはすっかり疎遠になってしまつて、今では帰省したときに予定があえば会うくらい。大学のときの恋人とも、しばらくは電話とメールで遠距離恋愛を続けていたけれど、いつの間にか自然消滅した。もう一年以上なんの連絡も来ていないし、こっちから連絡することも、たぶんもう無いだろう。それでも未だに携帯の連絡先だけは消せずにいるのは、完全に繋がりを無くしてしまうことが怖いからだ。

同僚と世間話をしたりはするけれど、それはやっぱり友達とは違う。どこか一線を引かれているという気がするし、それは私のほうも同じことだ。こちらから相手に踏み込むことはないし、相手にも踏み込ませない。そんな微妙な距離感を保っている。

仲間とか親友とか同士とか、名前は何だつていいけれど、それは今の私には無いもの。学生時代にはあんなに簡単にできていたことが、今となっては何よりも難しいのだと思わずにはいられない。

だから、私はここにいる。

真っ暗な部屋に帰るのが嫌だから。面白くも無いテレビの音で気を紛らわせながらコンビ

二弁当を食べていると泣きそうになってしまふから。一人きりの夜が長すぎるから。だから、私はこうして無意味に雑踏に紛れているんだろう。

ふと、視界の端に女性の姿が写って、私は何気なくそちらへ視線を移した。

女性……いや、少女かもしれない。横顔は大人びているのに、身にまとう独特の雰囲気は無垢な少女のようでもあった。キラキラと輝くような大きな瞳が印象的で、雑踏の中にいるのに、周りの人たちとはまるで違つて見えた。

少女は薄青色の地味なワンピースだけを着て、ただそこに立っている。腰まである真っ黒な黒髪にも何の飾り気も無い。それなのにピンと背筋を伸ばしたその立ち姿は妙に様になつて見えた。

彼女は思案顔で、丸めた人差し指の背を唇に当てている。そんな何気ない仕草が気になつたのは、その表情がなんとなく笑っているように見えたからだ。

ここで何をしているんだろう。私は自然とそんなことを想像していた。鞆も何も持っていないから、これからどこかに行くというわけではないだろう。しばらく見ていたけれど、誰かと待ち合わせしているという様子でもなさそうだ。

もしかすると彼女も私と同じように、雑踏に紛れることで寂しさを紛らわそうとしているのだろうか。だとしたら友達になれるかもしれない、と思つた。

そうしてそのまま彼女を眺めていると、彼女はふいに、広場に備えられた柱時計へと目をやった。つられて私もその視線を追う。

瞬間、それが合図だったかののように、カーンカーンと小気味のいい鐘の音が辺りに響いた。時刻はちょうど六時になったところだった。

これ待っていたのか。私は答えを確かめるように、再び彼女へと視線を戻す。

すると、彼女はいつの間にか、まっすぐに私を見つめていた。

「……え？」

真正面から視線がぶつかる。

時間が止まったみたいなのに、周囲の雑音が遠のいていく。

勘違い、ではないのだろう。彼女の視線の先には私しか居ないのだから。彼女は微笑を浮かべたまま、目を逸らすことなくじっと私の瞳を見つめている。私も目を逸らせずに、そのまま彼女を見つめ返した。

目を合わせたまま、彼女はゆっくりとこっちに向かって歩いてくる。蛇にいらまれた蛙のように、私は逃げることも隠れることもできずに、ただじっとそのときを待った。

私の目の前、手を伸ばせば届くような距離まで来た彼女が、そこで足を止める。周囲に響いていた鐘の音が、ぴたりと止んだ。

それから彼女は、呆気にとられている私に向かって、満面の笑みを向けたのだった。

Y O T A Y U

AMPLIFIER